

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 中島敦 『李陵』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>



第 43 回のツイキャス読書会の課題図書は、中島敦の『李陵』です。 [青空文庫](#) 『李陵』

[私も朗読しました。](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「李陵」感想文

3行読んだところで、漢字に圧倒され、giveup しましたが、昨夜もう一度 try しました。慣れてくると読み易くなりました。

いわゆる戦国小説なので、争いの予測できない先の展開に引き込まれ、最後まで読み進めることができました。

私は戦いの小説は昔から興味がない人間でしたので、この本は初めて読んだその部類の本かもしれません。

おそらく、それは、各登場人物の思考や心情、またその変化が詳しく書かれていたからだと思います。出来事を読んで楽しむだけでなく、視点を変えて心情を読むようになったのは、この読書会のおかげだと思っています。宮澤さん有難うございます。

私は李陵が友に帰国を誘われた時に答えた「帰るのは易い。だが、また辱めを見るだけのことではないか？」が一番印象に残りました。

ここの辱めは、他人に辱められるのではなく、自分が自分を辱めるという意味だと思いました。

李陵は 蘇武の行動を見て、自分が良かれと思ってやって来た事は間違っていた。

国（みんな）への愛からやって来たのではなく、自分をよく見せたいためにやってきたことに気が付いたのではないのでしょうか？

自分が勝ち目のない無茶な戦を行ったことで、自分を信頼して行動を共にした多くの歩兵らの命を奪ってしまった。家族も断罪に導いてしまった。それは、自分の見栄と意地のせいであったと。

私も自分の行いが自然の愛情からのものなのか、よく見られたいと思う見栄なのか分からない時があってよく悩みます。悩むこと自体が見栄の証拠かなとも思います。

悩まなくなった時が自然に行えた時に違いありません。早くそんな人間になりたいです。

(おわり)

『男達の生き方』

新潮文庫の李陵を読み進めるも1ページの中だけでも、かなり意味がわからない言葉があるので、注解を読みまた本文に戻る。

スラスラ読めないのが作品なので、苦戦しつつも読みきりました。

が、この作品の内容がイマイチよくわからない。

あらすじをまとめてあるサイトを参考にさせていただきました。

李陵率いる軍は五千。

対する匈奴は十万。

李陵は見事に生け捕りになってしまい、自ら首をはねて辱しめを免れるか、一応は敵に従っておいてそのうちに機を見て脱走するの2択で後者を選び生きることを選ぶ。

この選択肢では、普通の人なら自殺すると思います。

仲間が死んでいるなかで、自分一人だけが生きることを選択したのはとても勇気のいることだと思う。

李陵の祖父は武名が高く匈奴の王から勇敢に戦ったと客人として扱われる。(普通、ここで李陵は殺されそうですが、且てい侯単于は誉めてくれるし寛大だなと思いました。)

李陵も相手の王子に射術を教えるのは、敵であったとしても自分の技術を伝えるのは素晴らしいと思いました。

武帝の顔色を伺い李陵の悪さを周りの人が言う中で、司馬遷は敗れはしたものの李陵の戦いを正直に誉めて皮肉にも50過ぎて宮刑を下されてしまうのはなんとも言えない気持ちになりました。

宮刑でも下手すると死ぬそうですが。

死を覚悟して進言したのに死以上の恥のある酷い刑を昔の人は、本当にいろいろ考えるよな〜とつい感心してしまいます。

司馬遷は武帝や李陵と盃を交わした人達を恨みつつも、恨むに値せず、自分自身を恨み死のうとするが、史記の編纂するためだけに生ききった。

また漢の武将・蘇武は匈奴に捕まるがネズミなどを食べて愛国心のためだけに生きのび、何の為にこの人は生きているのかと李陵が自問する場面では、蘇武と李陵の関係が光と闇のようにあり、李陵には蘇武の存在が眩しかったと思う。

李陵の一遍の詩が自ら女々しいと思いつつも、一族が滅ぼされたり国にも帰れない状況を考えて涙が枯れるまで泣いて下さいと思いました。

武帝を含めて、昔の人は血の気が高く、命令に失敗すればほぼ《死》しかないので、物騒ではありますが、まだ今の世の中でヘマしても死ぬことはないので良かったと思います。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

笑わない男の涙

「笑う」ということは全ての生物において人間だけが行うものです。犬や猫、猿や馬やハムスターなど笑ったような顔をする動物はいても、声に出してワハハと笑うのは人間だけです。よく笑う人は笑わない人に比べ心疾患にかかるリスク、死亡リスクも低くなると大規模な研究で証明されています。

武帝を中心に描かれた男達、司馬遷は1人だけ李陵を庇う発言をした為宮刑に処せられ、怒りの矛先を武帝でも、イエスマンばかりの官吏達でもなく自分自信に向けて蚕室の中、獣の様な声をあげたあと、自分は死んだものとして再び筆をとった。

蘇武は匈奴に降ちても寝返ることを拒み続け、北辺の地で飢えと寒さに耐え続けていた。

李陵は匈奴に降ち、次第に土地の文化風習を理解し、漢にいた頃の自分を顧みた。妻を与えられ子を授かり、自らの首を斬ることも、漢に残っていた一族を殺された恨みを晴らしたくとも漢の軍を攻撃することはできない。ただ馬に跨り草原を駆け抜け、叫び声をあげるだけの日々。

誰も笑わないし笑えない。ただ、蘇武が漢に帰る際の宴で泣きながら歌を詠んだ李陵の中に、僕は天もしくは神でもなく人間らしさを見ました。

読んでみて中島敦の作品で一番好きになりました。課題図書に選んでいただきありがとうございます。

読書を楽しめる喜びを胸に、また笑って暮らしていきたいと思いました。

(おわり)

エヴァタさんのブログです。 『弱視目線』 <https://blogs.yahoo.co.jp/childrenkaneyou>

李陵 中島敦 読書感想文

李陵、司馬遷、蘇武。政治に翻弄される時代。漢の武帝を上に、それぞれの置かれた宿命に心では抗いながら、選んだ運命は受容し、男らしく自分と戦う三様の人生。歩兵が連なり、砂漠を歩む夜の光景、空には美しい星。大陸の戦は想像を越えてただただ広い。北の荒野に吹きすさぶ風に飛ばされぬ強い生き方、個人としての怒りは冷たい烈火として燃え、不屈の魂は堅く、不動なるものが闊達な言葉で綴られてゆく。

向こう見ずなその男—歴史家司馬遷が登場してからは、ふと筆圧が軽やかに感じられ、そこから人物がより生き生きとしてくる。項羽が戦いの途中、四面楚歌となり陣營で悲憤した儂い歌を詠んだあと、書いた司馬遷が自らに投げかける。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされたような書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。しかし何と生気澆刺たる述べ方であったか？ 異常な想像的視覚を有った者でなければ到底不能な記述であった。

項羽が項羽であるには、「作ル」部分を削りすぎてはならない。ハツラツと呼吸させねば「述べる」ことにはならない、と。李陵をかばったために屈辱的な宮刑に処され、誇りを失っても仕事を貫き「史記」を収めた精神はどこまでも強靱で書くことへの執拗さに圧倒された。

司馬遷に吐かせた独白は、作者が自身へ呼びかけた声のように思えた。33歳で夭折した中島敦の独白の先に、秀逸な作品が生まれ得た可能性があったのに、人の寿命には限りがありとても残念に思う。自己に明晰で多次元的な視覚の持ち主の作品をもっと読みたかったと悔やまれるばかりです。

(おわり)

『李陵』 感想文

とにかく漢字が多くて一行目から軽く目眩がしそうでした。

本の後ろの方にある注解と、にらめっこしながら何とか読むことができました。

私が李陵だったら、もし味方の誰かが李陵は敵の軍を率いていたとか、仲間を裏切ったなどという嘘の情報をながしたとしても、自分の仕える武帝に「李陵は、そんな奴ではない。何かの間違いではないかと」と、信じてほしいと思う。

誰かの言葉を鵜呑みにして、信じてもらえなかったら今までの関係性や、働きや活躍とかまでも無かった事になるような気持ちになって、すごく辛いしこれから何のために生きていけばいいのか分からなくなるなと思いました。

忠誠心なんて私も無くなっていたと思います。

全然話が違うかもしれませんが、朝、熱があるので今日は仕事を休ませてくださいと会社に電話をかけたら上司に「熱何度、ある？」「38度以内ぐらいなら出てきて」と言われても普段から頼りになる尊敬できる上司ならば、仕方ないから頑張ってお社しようと思うかもしれませんが、普段から上司に対して不信感を持っていたらもう会社を辞めよかなという気持ちになると思います。

蘇武のように何があっても武帝に、国に強い忠誠心を持つことができたほうが幸せなのかもしれないなと思いました。なぜ蘇武は武帝に強い忠誠心を持つことが出来たのか分からなかったです。

(おわり)

「李陵」の感想文

中島敦の「李陵」を初めて読んだ。同じ作者の「山月記」は高校の授業で取り扱われ、学校の先生が丁寧な解説をしていたのが印象に残っている。

李陵は漢の将軍として少ない兵力で匈奴に善戦するも、捉えられてしまう。その後、匈奴の単于は寛容すぎるほど李陵を優遇し、やりたくないことには拒否する権利すら与えられている。

匈奴は漢からは北狄すなわち北の蛮族と見做されているが、中に入ってみれば上記のように寛容で、粗野な正直さを持つ人々であり、李陵はもともと漢の将軍であったから討つべき敵と考えていたが、漢で自分の一族が処刑されてからは尚更どちらに与するが正しいことなのか自分でも判然としなくなってくる。

そんなとき、李陵は自分と同じく匈奴に捕らわれたものの、頑なに降伏を拒み続け北海の地に引き留められている旧知の蘇武に降伏を勧告するよう単于から指令を受ける。酷寒の地で漢はおろか匈奴の単于にも現状を知られないまま人知れず瘦我慢を続けている蘇武に衝撃を受け、自分と比較し苦悶する。数年後、蘇武は武帝の崩御の知らせを受け、号哭するが、李陵は一滴の涙も浮かんでこない自分に懷疑する。

結局、蘇武は十九年ぶりに漢に戻ることになったが、李陵は使者が説得に来たのにも断り、胡の地で生涯を全うした。

一読したが、司馬遷が李陵の物語にどう絡んでくるのかが今一つピンと来なかった。また、かなりの部分が史実にもとづいて書かれているようだが、作者がオリジナルで付け加えた点やこの作品を書いた意図などが分かればもっと理解が深まるのに、と思った。

(おわり)

『李陵』 読書感想文

斬にあった女ども、成り行き上自殺せざる得ない事になった吉報の使者陳歩楽、思っている事をそのまま言っただけで宮刑になった司馬遷、国のために無理をして頑張った挙句、紛らわしい名前で罪人になった李陵、その罪人の家族も一緒に断罪される事などは野蛮だと思いましたが、他の国や部族を思い込みだけで敵対視。同族間での派閥争い。くだらない逆恨み。不正義な司法判決。いまひとつ尊敬できかねる最高権力者。正直者がばかを見て、ずる賢く立ち回る小者がいい目を見る事などは紀元前 100 年の中国が舞台の歴史小説ですが、現代の日本とさほど変わらないと感じました。

(調子のいい時だけではあるけど)高邁闊達で理解ある武帝の保護下にあり、幸せだった司馬遷、その恩恵を失う恐れがありながら、ひとりだけ李陵を庇ってくれたのに、李陵はありがたく思っていないという記述は、司馬遷のその後の苦悩が凄まじいものだったので、余計に痛ましく思いました。

李陵は、義人である蘇武に出会ってしまったことで、自分は売国奴だと自覚し、劣等感をおぼえ、女々しくなっています。考えるのが面倒だった李陵ですが「どうした拍子にひょいとそうゆうものの感じられる事がある」という描写があり、ここで初めて他人の内心を感じたのだと思いました。

「誰一人己が事績を知らなくても差し支えない」という蘇武「やむを得なかった」と言い訳しない蘇武。李陵にとって、崇高であり悪夢でもあり、みたい気持ちと避けたい気持ちがある、愛憎とは違う複雑な心情だと思いました。

こんこんと常に湧き出る最も親身な自然な愛情を、みていないようできて、やっぱり天はみているという境地に達した李陵はその後、地味に人知れず清冽純情に暮らしていたんだと想像したいです。

最後、子の名が記されていないという記述は、物悲しく感じました。

(おわり)

『国土への信奉』

蘇武は、囚われの身となった匈奴の地で長い間想像を絶する苦難や孤独を耐え忍んできた。自分の忠誠が漢に届くことも期待できない中で。

この蘇武の生き方に李陵は驚きを隠せず、同時に脅威を感じた。寛大さを持ち合わせて余裕さえ伺える旧友は、なぜいばらの道を行くのか？

蘇武の兄も弟も過去に国から責めを負い自殺に追い込まれている。その事への怨みの感情もあったに違いない。にも関わらず、蘇武は国家の長である武帝の死を知り慟哭した。そんな蘇武を前にして李陵が感じ取ったのは、蘇武の純粋な「国土への愛情」だった。

この「国土」という表現が私には意外だった。もし「国家」という表現ならば、イデオロギーと人を含めた「システム」を連想するのだけれど、国土となると、領地すなわち土地である。

蘇武の心に据わっている強固な思いは、国土への帰属意識なのだろうか。それとも生まれ育った故郷の風や空や大地なのだろうか。その両方なのだろうか。

一方、漢で母妻子を族滅された李陵は、その憤怒を抱えながら、自分にとって漢とは何なのかと悩み苦しむ。「ああ我もと天地間の一微粒子のみ、何ぞ又漢と胡とあらんや」(新潮文庫 p136 最後)

李陵は、漢との戦で自分に声をかけてこなくなった单于に「男」を感じ取った。自分を慕う单于の長男左賢王に親しみをおぼえ、单于の娘を妻に迎えた。李陵は、自分を取り巻く人間関係に依拠して生き方も変化させている。どの土地に生れようが、人として生きていることに変わりはないという李陵のスタンスに、どちらかといえれば私は共感した。

19年の異国の生活を経て漢に帰国した蘇武の記述に、私は北朝鮮拉致被害者が日本に帰国されたときの感情を想像した。長きに渡る祖国との断絶を経て、蘇武の再出発はうまくいくのだろうか。人の気持ちは本当に難しいなあと思う。この小説から国家もしょせん感情を持った一部の人に司られている内実がハッキリ浮かんでくる。だから個人は、自分の貫くべき事は何か、どう生きていくのか。それぞれの登場人物の苦悩が、中年の域に達した私には決して人ごとではない。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 落ちない狼星 』

人が亡くなる時の比喻として「星が落ちる」という言葉がある。星が落ちる時とは、肉体が息絶えた時なのか、はたまた信念が潰えたときなのか…その問いは、登場人物たちが体現してくれた。私は座していながら、三人の数奇な運命を辿ることとなった。

漢の武官李陵は、少数の兵を率いて匈奴と激戦を戦い、南下する途中で匈奴に囚われてしまう。李陵は判断を迫られるが、単于の太陽政策により、匈奴の中で様子を伺う決断をする。この敗戦には、複数の人間の「感情」が交差する。まず、老将路博徳により兵を減らされ、妻を李陵に殺された軍候管敢が匈奴に降り、漢軍に後援がないことをバラしてしまう。以前は庸王ではなかった武帝も佞臣や酷吏の言を受け入れてしまい、匈奴に降ったとされた李陵の一族を殺してしまう。それが、李陵の心境にも多大な影響を与え、ますます漢に戻れないスパイラルにはまる。人間は、自らの感知しないところで、他人の黒い感情に巻き込まれる恐ろしさがあるのだ。

李陵は先に囚われていた蘇武に再会するが、想像を絶する困窮の中で降伏もせず、意地を貫いている様に我が身を振り返る。このような生き方をしてきた蘇武に羨望の気持ちが芽生える李陵だが、私は李陵の生き方も否定しない。数々の人間の感情の渦の中、ひとつひとつの決断はその時の李陵にとって、致し方ないと思うのだ。人間はそれぞれ別個の性質と個性を持っており、蘇武と同じく、李陵も自らの信念に従って生きていたと私は感じる。それは、決して漢を裏切っていないことに表れている。

その李陵を武帝の前で庇い、宮刑に処された司馬遷も、人間として死しても尚「史記」の編纂への信念のみで生きる決意をする。傍からみれば、蘇武も司馬遷もなぜ命を絶たないのかと李陵が感じたように思うだろう。しかし、人間は肉体だけで生きているのではなく、「信念」が伴って初めて「生きる」といえるのではないか。信念がない人生は、そもそも「死んで」いるのだろう。

この三人は、それぞれの信念に従って「生きた」。彼らの狼星は、肉体が死んでも落ちなかったに違いない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「李陵には、天命を知ることが与えられていない」

古代中国において、天命は王朝の正統性 (legitimacy=レジティマシー) の根拠である。天は、己に代わって、地上を統治するものを探している。天命は下り、前漢第七代皇帝の武帝が誕生した。彼が天の代理人となって、漢は帝国の最盛期を迎えた。いかに、武帝が気まぐれで、ときに、神がかりであろうと、司馬遷が云う通り『なんといっても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動だもしない』のである。君側の奸が、全軀保妻子(くをまっとうしさいしをたもつ)の臣であり、宮廷が腐敗し、権威主義に陥ろうとも、漢という帝国は、武帝に下された天命によって十全に支えられている。

しかし、李陵は天命を知らなかった。

(引用はじめ)

しかし、天はやっぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。見ていないようできて、やっぱり天は見ている。彼は肅然として懼れた。今でも、己の過去をけっして非なりとは思わないけれども、なおここに蘇武という男があつて、無理ではなかったはずの己の過去をも恥ずかしく思わせることを堂々とやってのけ、しかも、その跡が今や天下に顕彰されることになったという事実は、なんとしても李陵にはこたえた。

(引用おわり)

誰しも我が身が可愛いから、究極的に何処かで、自己正当化や言い訳によって自分をだます。李陵も、どこかで自分が正しいと思いこんでいた。政局を、政治の実体と誤解し、天命の代理人としての武帝を見くびっていた。李陵が、一族の死を憂えるゆえに、祖国を恨み、祖国を捨てたのは、実は彼が、天に見放されていたからだ。蘇武が仰いでいた天を、李陵は見失っていた。それゆえに自己欺瞞にとらわれ、単于に懐柔されてしまった。一方、蘇武は、武帝の崩御にあたって、南の天に号哭し、血を吐いた。その姿を、やはり、天は見ていた。

国を思う李陵が気持ちの底には、国土きどりのナルシズムがあった。

それが、かの愛国者の弱さだった。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343